健常群における催眠感受性と解離傾向の関連

○中谷智美¹・大浦真一¹・今井田貴裕¹・福井義一²

(1甲南大学大学院人文科学研究科・2甲南大学)

キーワード: 催眠感受性, 日常的解離, 解離傾向

Relationship between hypnotizability and dissociation in healthy subjects

Tomomi NAKATANI¹, Shin-ichi OURA¹, Takahiro IMAIDA¹ and Yoshikazu FUKUI²(¹Graduate School of Konan University, ²Konan University)

Key Words: hypnotizability, normal dissociation, dissociation

目 的

催眠感受性とは、催眠暗示に対して反応する個人の能力を意味している。催眠感受性が、解離傾向と関連していることを示す観察や考えは古くから存在していた (Bliss, 1998; Hilgard, 1977) ため、臨床群や健常群を対象に両者の関連が検討されてきた。臨床群を対象とした研究では、その大半で両者に有意な正の関連が報告されている (e.g., Bryant et al., 2001; Covino et al., 1994)。しかしながら、健常群を対象とした研究では、両者に正の関連があるという報告 (e.g., Butler et al., 1997) と、無関連であるというもの (e.g., Dienes et al., 2009) が混在しており、結果に一貫性がない。

健常群で結果に一貫性がない理由の一つに、解離傾向の測定に Dissociative Experiences Scale (以下 DES; Bernstein et al., 1986) が使用されていたことが挙げられる (Putnam, 2000)。DES は、解離性障害のスクリーニングを目的として (Putnam, 1997)、解離性障害の患者から項目を直接聴取して作成された尺度である (田辺・小川, 1992)。そのため、DES で測定された結果は、健常群では得点分布が極端に低得点に偏ることが分かっており (福井, 2017; 田辺・小川, 1992)、健常群の解離傾向の把握には適していない可能性がある。一方で、舩田・中村 (2005) による日常的解離尺度は、大学生が日常的に経験する解離現象を測定する尺度であるため、健常群における解離傾向を正確に把握することが可能であると思われる。

そこで、本研究では、解離傾向を日常的解離尺度と DES の両方を用いて測定し、催眠感受性との関連を検討した。

方 法

参加者 大学生・大学院生 24 名 (男性 6 名, 女性 18 名: 平均年齢 26.91 歳, $SD = 13.01$) が参加した。

尺度構成 催眠感受性を測定するためにハーバード集団催眠感受性テスト型式 A 修正版 (以下 HGSHS: A; Shor et al., 1962, 高石昇訳, 未刊行) を使用した。具体的には、呈示された催眠暗示に反応していた程度 (客観的・主観的経験) と、

催眠に入っていた深さ (全般的な主観的評価)、催眠中に経験したこと (他の主観的経験) について回答を求めた。さらに、日常的解離傾向を測定するために日常的解離尺度 (短縮 6 項目版) (舩田・中村, 2005) を、臨床的解離傾向を測定するために邦訳版 DES (田辺・小川, 1992) を使用した。

手続き 催眠感受性測定の実験では、協力者 2 人以上を 1 グループとして、それぞれのグループが希望する日時に実験室へ集まってもらった。参加者に対してあらかじめ録音された催眠誘導と 12 の催眠暗示の音声呈示し、音声呈示終了後、HGSHS:A への回答を求めた。日常的解離と DES を含む質問票は、持ち帰って回答してもらい、後日回収した。質問票には、他にも本研究で使用しない尺度が含まれていた。

結 果

日常的解離と DES の正規性を検討するため Shapiro-Wilk の正規性検定を行ったところ、日常的解離と DES のどちらにおいても、正規性は棄却されなかった ($W = .958, p = .458$; $W = .933, p = .145$)。また、歪度は、日常的解離で-.091, DES で.717 であったため、変換せずに用いた。

次に日常的解離と DES それぞれの合計得点について、HGSHS:A の下位尺度得点との関係を相関分析によって検討した結果を Table 1 に示した。HGSHS:A の各下位尺度と日常的解離、DES との間には有意な相関は認められなかった。

考 察

本研究から、臨床的な解離が日常的な解離に関係なく、健常な人々においては解離と催眠感受性の間に有意な関連が見られないことが分かった。したがって、健常群において催眠感受性は解離傾向と関連しないことが示唆された。

高催眠感受性者は、解離傾向の高低で複数のサブタイプに分けられ (Terhune et al., 2011)、DES の得点が高い群の中には、反応しやすい催眠暗示の種類に応じたサブタイプの存在も示唆されている (Pekala et al., 2000)。これらのことから、催眠感受性と解離の関連においても、複数のサブタイプが存在する

ことが予想される。しかしながら、本研究では実験協力者が少なかったため、サブタイプを抽出することができなかった。今後、対象者を増やして分析する必要があるだろう。

Table 1 HGSHS:Aと解離の相関係数

	HGSHS:A				解離傾向	
	客観的体験	主観的体験	他の主観的な経験	全般的な主観的評価	日常的解離	DES
客観的体験	—	.724 **	.479 *	.501 *	.074	.176
主観的体験		—	.652 **	.748 **	-.171	.147
他の主観的な経験			—	.714 **	-.153	.031
全般的な主観的評価				—	-.244	-.059
日常的解離					—	.607 **

** $p < .01$, * $p < .05$